by 境田雅之

NON-PACKAGED MUSIC

第10回

千野秀一
～無用の身体の美

©Gallery SURGE

千野秀一氏は1951年生まれ。彼の名前を聞いて、ダウンタウン・ブギウギ・バンドを連想する方も多いかもしれない。現在は即興演奏のピアニストとして、またキーボード・プレイヤーとして多くのセッションやコラボレーションを行なっている。主な共演者としては、舞踏の大駱駝艦主宰・麿赤兒、ダンスの江原朋子、音楽方面では、約15年に及ぶA-Musikでの活動をはじめとして、GROUND-ZEROの大友良英、ソウルフラワーユニオンの中川敬、NEXT POINTの向井千恵、クリストフ・シャルルなど、そうそうたる面々の名が挙がる。こうした多彩な演奏活動のほかに、千野氏は、コンピューターを使ったサウンド・アートや、音の出るオブジェによるサウンド・インスタレーションなども自身の表現の範疇とし、数々の作品を発表している。さる2月8日から3月8日の間に神戸ジーベックで展示された「蟲めづるII」も、そうしたものの1つである。今回は展示初日に自ら「蟲めづるII」の環境の中で行なったパフォーマンスの様子を中心に紹介することにしよう。

§

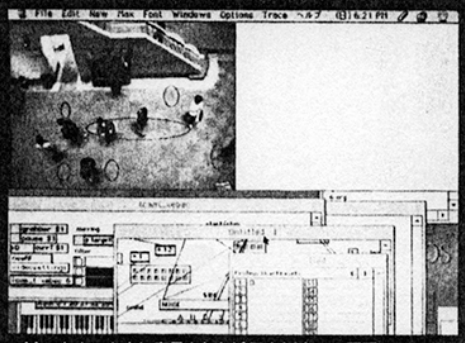
「蟲めづるII」は、昨年3月神田のGallery SURGEにおいて発表された「蟲めづる」のニュー・バージョンで、簡単に言うと、人や物の存在がコンピューターに認識されることによって音が生まれる作品だ。使用機材はビデオ・カメラとMaxをインストールしたPowerMacintosh8500/150、そして音源のE-MU Proteus/1 XR。ビデオ・カメラの視野の中に何カ所かのスイッチ部分を作り、このスイッチに当たる部分の画素の明度の変化（今回はバックグランドに対してより黒いものが検出されたとき）により、MIDI信号が発信されるようMaxでプログラムがなされているのがシステムの基本である。

展示初日に神戸ジーベックのホワイエで行なわれたパフォーマンスでは、黒ずくめのコスチュームで現われた千野氏がビデオ・カメラがとらえている領域にゆっくりと歩みだした。何カ所か存在するMIDIトリガーのスイッチになるスポットは、あらかじめ決められているものの、明確な場所がホワイエの床に描かれているわけではない。そのホワイエの空間を、あちらこちらへとさまようように歩く千野氏とともに、「蟲めづるII」はさまざまな音を発し始める。前衛的電子音楽の世界とも言うべき全く脈絡のない音色とフレーズが立て続けに押し寄せてくる、まさに分裂症的音響の世界。千野氏の日常的な動きと非日常的な音とのアンバランスは、不思議にアイロニカルな空間を出現させていた。また後半は、Macintosh内にサンプリングされていた音が千野氏の動きに応じて再生されるというプログラムも披露された。スイッチ領域で人や物が動くことによる画素の変化が、サンプリング音再生のスタート・ポイント、ボリューム、そしてピッチを決定するのだ。

§

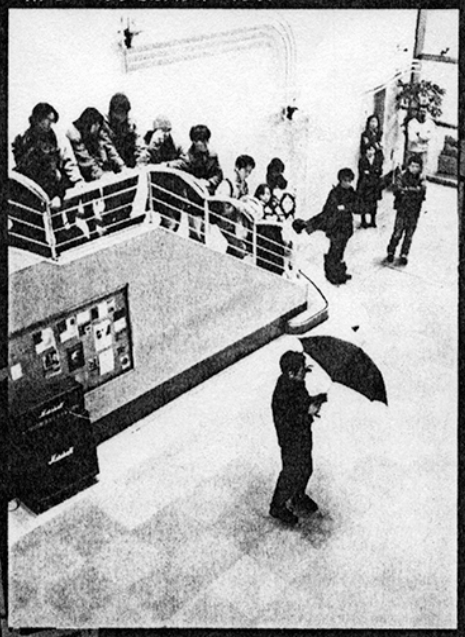
何もない空間に音が出る「蟲めづるII」。千野氏曰く、これは「見えない、触れない楽器」で、「普通、音を出すときは必ず楽器に触る。それがないことの不思議な感じが『蟲めづるII』の一番面白いところだ」と言う。そして千野氏は、「蟲めづるII」の環境の中に存在する観客たちの日常的な身体……特に鍛えられていたり、何かを演じているのではない、いわば無用の身体に愛着を持っている。それは上手な踊り手の身体だけが素晴らしいのではなく、普通の人の身体もまた素晴らしいという視点だ。なるほど、「蟲めづるII」という環境の中で、観客が見えない楽器の音を楽しむそのときの仕草は、音を抜きに考えるとまるで踊っているように見える。「その動きは無用だし、素晴らしい身体ではないという意味でも無用だ。だが、人がある瞬間にある形をとる身体そのものの『時』に私は引かれる。その一瞬はどんな人がどんな形をしても美しい」と千野氏は言う。そして「それを採取するために作った『蟲めづるII』は、ビジュアル作品なんですよ」とも付け加えてくれた。

コンピューターと音と身体の関わりの中に、無用の身体の美を見い出したアーティスト、千野秀一氏の世界。読者の方々にもぜひ体験していただきたいと思う。



▲Macintosh上に表示されたビデオとMaxの画面

▼神戸ジーベックでのパフォーマンス



撮影：高嶋清俊